

トリアージナースが抱く緊急度判定の困難感に関する文献検討

○高岡 宏一（関西福祉大学看護学部）

I. はじめに

従来、救急医療分野では、患者の重症度だけではなく重症化を防ぐための時間的余裕を判断する緊急度判定が注目されている。この役割の多くは救急外来で緊急度判定に従事する看護師（以下、トリアージナース）が担っている¹⁾。トリアージナースは緊急度を適切に判断するための専門的知識や救急処置技術、多職種との連携など多岐にわたる能力の習得が必要となる。さらに、救急外来には軽傷から重症まで多岐にわたる患者が搬送されるため、その状況に応じた臨床判断が求められる。従って、緊急度判定は非常にストレスフルであり判断に困ることも多く、先行研究では9割のトリアージナースが判定に困ったことがあると述べている²⁾。このようなトリアージナースが抱える困難感を検証することは、より効果的な緊急度判定への示唆となり、救急外来での急変や重篤化予防への貢献が期待される。本研究の目的は、緊急度判定に焦点を当てて、トリアージナースが抱く困難感を明らかにし、今後の示唆を得ることである。

II. 研究方法

文献検索は医学中央雑誌 ver.5、メディカルオンライン、Google Scholar を用いて、『緊急度判定/院内トリアージ』『困難/困難感』『臨床判断』『救急看護』『トリアージナース』をキーワードに、2000年以降に掲載された原著論文を検索した。次いで、目的に合致する文献を選定し、トリアージナースが抱く困難感およびその対策について検討した。

倫理的配慮としては、著作権の侵害がないよう、引用文献名や引用文献箇所を明確にした。

III. 結果

該当する23件を精読し、研究目的に合わせて最終的に9件の論文を選定した。内容としては、救急施設へのアンケート調査が3件、緊急度判定に関する実態調査が2件、トリアージナースへの教育介入が2件、トリアージナースへのインタビューが2件であった。看護師が抱える困難感の要因として、『組織体制の不備』『人手不足』『緊急度判定方法が統一されていない』などの環境的な要因と『学習機会の不足』『相談できる相手がいない』などの個人の能力に関する主体的な要因が報告されていた。また、トリアージナースは自身の役割や能力にストレスを抱えやすいことが挙げられていた。一方、困難感を緩和するための措置としては、『緊急度判定の標準化』『事後検証によるフィードバック体制の確立』が有効であることが述べられていた。

IV. 結論

本検討で明らかになったことは、トリアージナースが抱く困難感は環境的な要因と主体的な要因が存在する。これらの困難感への対策として、統一された緊急度判定を行うための標準化されたトリアージツールの導入や多職種で行うトリアージカンファレンスの導入が有効であることが示唆された。

V. 文献

- 1) Rowe, B. H., Villa-Roel, C., Guo, X., et al. (2011): The role of triage nurse ordering on mitigating overcrowding in emergency departments: A systematic review. *Acad Emerg Med*, 18(12), 1349-1357.
- 2) 林幸子, 西村里子, 宮澤佳子(2004): 看護師によるトリアージを実施して 現状と課題. *日本小児救急医学会雑誌*, 3(1), 141-145.